

絲綢之路

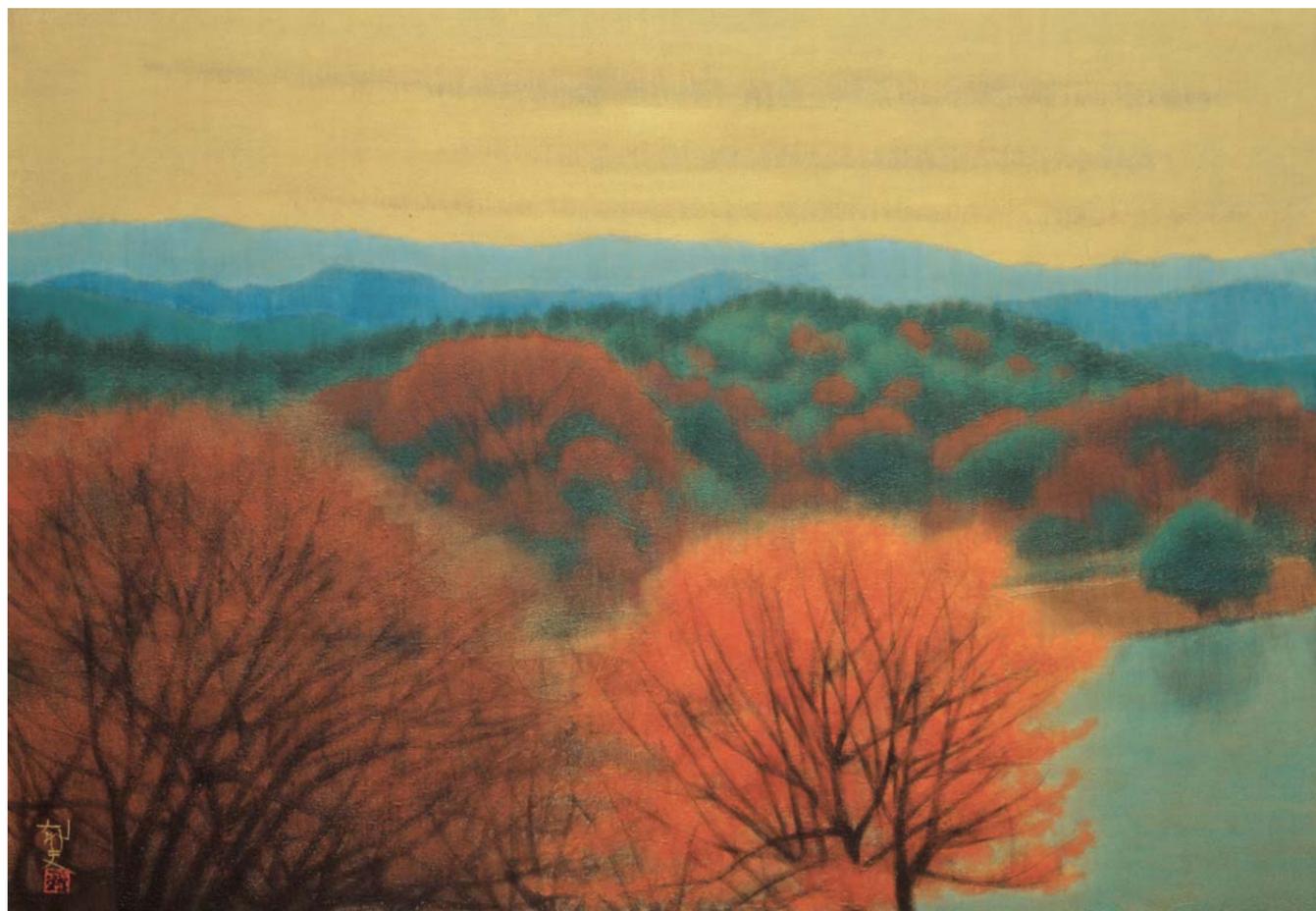
シルクロード

S I L K R O A D

2011-秋

No.67

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



修学院離宮秋声 2004年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二



東日本大震災と被災文化財救出

この度の東日本大震災で亡くなられた皆様に心から哀悼の意を表します。また、被害を受けられた皆様にお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

東京国立博物館では、今年の一月十八日から三月六日まで、文化財保護法制定六十周年記念「仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護展」を開催しました。これは平山先生が亡くなられてから一年が経過した時点で、平山先生の文化財保護にかかわる活動を、仏教伝来の道、シルクロードを中心に振り返り、先生の活動を顕彰するとともに、文化財保護の重要性や課題を改めて広く知って頂くという意図からのものでした。平山先生の提唱した「文化財赤十字」活動の成果を示す仏像や壁画の展示、その修復の状況の紹介、さらには薬師寺に奉納された大作「大唐西域壁画」の寺外での初めての公開など話題性にも富んだ展示内容で、多くの方々にお越しを頂きました。

この平山展が終了して五日目の三月十一日に東日本大震災が発生

しました。多くの方々の懸命な努力にもかかわらず六ヶ月以上経過した今日なお復旧復興への道は未だ遠しの感があります。

今回の大震災では地震と直後の巨大な津波により文化財にも甚大な被害が生じました。財日本博物館協会の調査では、東北を中心とする十八都道府県に所在する、調査への回答のあった会員館三百八十八館のうち何らかの被害を受けた館は百五十二館、五月末の時点で閉館中の施設は二十六館でした。特に岩手県の陸前高田市立博物館、海と貝のミュージアム、宮城県の石巻文化センター、歌津魚竜館などは大きな被害を受けました。被害の状況も建物や設備、展示室や資料の被害に止まらず、職員が直接被害に遭われた館もありました。

文化庁では、阪神淡路大震災の経験を生かし「文化財レスキュー事業（被災文化財等救援事業）」を展開することとしました。文化庁の要請を受けて、四月一日に十一団体が参加して「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」が結成され、国立文化財機構に事務局が置かれました。また、文化財レスキューの為の募金も始められ、受け入れ先は、平山先生ゆかりの公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団にお引き受け頂きました。具体的なレスキュー活動は、宮城県、次いで岩手県の被災文化財について、そして現在

城塞に囲まれたわずか一方^{キリヤ}のエルサレム旧市街は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三宗教の聖地であり、そのことが、今に至る民族や宗教間の多くの抗争の原因ともなってきた。東のオリブ山からは、ユダヤ教徒の祈りの場「嘆きの壁」、キリスト教「聖墳墓記念聖堂」、イスラム教のモスク「岩のドーム」など、複雑な聖地の全景を目にすることができる。

(一九八〇年に文化遺産として登録。翌一九八一年に危機遺産に登録)

※ヨルダン・ハシエミット王国による申請

公益社団法人

日本ユネスコ協会連盟



東京国立博物館館長 銭谷 眞美 (せにや まさみ)

は茨城県、福島県に及んでいます。具体的には救援委員会に参加した国立文化財機構、国立美術館、人間文化研究機構、財日本博物館協会、全国美術館会議などの研究者・学芸員が現地に赴き、海水や泥水につかった文化財に応急措置を施しつつ安全な場所に一時保管し、安定化処理などが行われています。古文书、絵画、民具、動植物標本、など幅広い博物館資料が救援対象となっています。例えば、陸前高田市立博物館の被災資料の多くは、廃校となった旧生出^{おひで}小学校に一時保管されています。その内容をみると紙資料(歴史資料)、絵画、衣装、漆器、民具、貝類、化石、土器、昆虫、植物標本、剥製など多岐にわたり、その処理もクリーニング、脱塩、乾燥、燻蒸が進行中ないし準備中といった状況です。これらの処置は現地のみならず、一部資料は全国各地の博物館や大学などに引き取られ、そこでも処置が行われています。

現在行われている処置は劣化を一時的に止める安定化処置であり、その後には本格修理の必要があります。すなわち文化財レスキュー活動はなお、継続中であり、さらに本格的修理やもともとの博物館等に戻すことまで考えれば、極めて息の長い作業となります。

これまでの関係者の献身的な努力に感謝しつつ、さらに幅広く手厚い支援の必要性を感じます。

エルサレムの旧市街とその城壁群



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

被災文化財レスキュー活動の今後の課題

去る三月十一日、東日本の太平洋沿岸を襲った巨大地震と大津波の残した傷跡は余りにも大きかった。多くの尊い人命が失われ、人々の大切な財産が奪われた。加わるに文化財の被った被害も大きく、その修理・修復は長期化が予想されている。今、被災文化財は、どうなっているのか。ありのままの現状を報告……。



文化庁
文化財部美術学芸課長
栗原祐司
(くりはら ゆうじ)

オールジャパン体制の文化財レスキュー活動

世界中を震撼させた東日本大震災から半年以上が経過した。震災による国指定・登録文化財の被害状況は、七百二十五件（一都十八県）にのぼり、まさに文化財保護法制定以来未曾有の大惨事となった。文化財レスキューに関しては、これらの指定文化財だけではなく、緊急性の高い沿岸部の古文書や民俗資料、被災した博物館の多岐にわたる博物館資料等未指定の文化財等を中心に、四月以降、宮城県、岩手県、福島県、茨城県において救援活動を行ってきた。文化庁だけでなく、各地域の資料ネットワークや博物館等が主体となった活動も、各地で積極的に展開されている。阪神淡路大震災の事例を参考にしつつ、半ば試行錯誤しながら開始された文化財レスキュー活動は、文化庁の枠組みの中で行っている救援活動だけでなく、おおよそ四十カ所以上で、各専門団体・機関等からの献身的な御協力により、八月末時点で延べ二千百人（平成二十三年九月末現在）以上の参加を得て行われており、まさにオールジャパンの広域的な支援体制で行われているといえる。さらに各地域の関係団体等によって独自に行われている救援活動



関係団体による被災文化財の応急措置が進む
(陸前高田市)

長期化する被災文化財の修理・修復

現段階では、現地における救出作業は一部を除き

も含めれば、優に百カ所は超えるだろうと思われる。これらの中には、石巻文化センター（宮城県）や陸前高田市立博物館（岩手県）のように、津波により博物館施設全体が被災するという博物館史上経験したことのない最悪の事態となったところもある。いずれも十万元以上にのぼる博物館資料を救出したが、瓦礫や汚泥の撤去から始まる救援活動は困難を極め、石巻文化センターでは二カ月以上も費やした。

これらの文化財レスキュー活動は、文化財保護・芸術研究助成財団の協力を得て、国内外から集められた寄附金をもとに東京文化財研究所に「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」の事務局を置いて運営がなされており、当初は旅費については各参加団体や所属先等に御負担いただいていたため、休暇等を取ってボランティアで参加せざるを得なかった方々には御迷惑をおかけしたが、八月一日以降、文化庁の委託事業として参加団体からのすべての派遣専門家に旅費を支払うことができるようにし、より円滑かつ効果的な救援活動の実施に努めている。

陸前高田市立博物館では、展示施設はなくても、すでに収蔵品を活用して市内の学校に対するアウトリーチ活動を始めた。被災しながらも、懸命な作業で施設設備の修理を行い、再開を果たした館も多いことは大いに勇気づけられる。文化庁としては、今後ともこうした動きをより一層促進できるように、文化財保護・芸術研究助成財団をはじめ関係団体等の協力も得ながら、支援の充実に努めていきたいと考えている。

*MLA：博物館、図書館、公文書館



昆虫標本も甚大な被害を受けた。
(岩手県立博物館)

今後待ち受けるもの

今後の課題としては、まずは、それらの応急措置を施した文化財を長期的に保管する場所を確保することである。特に石巻文化センターや陸前高田市立博物館等は、新しい施設が竣工するまでには復興計画との関係も考えれば五年以上はかかると思われ、他の施設において一時保管するの自ずと限界がある。また、現在仮収蔵している施設の中には空調設備が整っていないところもあり、日々カビ等との戦いが続いている。この問題を解決しない限り、文化財レスキューの仕事は終わったとは言えないだろう。被災した文化財の保存・修復は、保存環境を含む様々な観点からの対応が不可欠であり、長期的な視野に立った継続的な体制とそれに伴う施設設備等の整備が求められる。さらに、それらの資料を管理するためのデータベースの作成も不可欠である。資料台帳が流失したところもあり、破損した資料の残存状況調査も含め、本格的な資料管理とデータ化が必要である。

今回の震災で被災したのは博物館だけではなく、図書館や公文書館等も甚大な被害を受けた。これらの施設でも行政文書を始め多くの文化財等を所蔵しており、同様に資料の救出、搬送、一時保管等を行う必要がある。このようなときにこそ、行政の縦割りを超えたMLA連携の推進が強く求められよう。今後、被災文化財のレスキュー活動やその後の修理・修復に関する記録も、しっかりと後世に伝えていく必



息の長い地道な作業が続く水損資料の応急措置
(岩手県立博物館)

日中韓文化交流フォーラム報告

第7回

韓国の古都・慶州で開かれた日中韓三カ国による文化交流フォーラムも回をかさねること7回。討論も熱気に満ちたものとなったが、互恵の精神のもとで、フォーラムがかかえる今後の課題とは……？

財団専務理事

小宮 浩

(こみや ひろし)

新羅の栄光を伝える 古都・慶州

第七回日中韓文化交流フォーラムは、九月二十日から二十二日まで、韓国の古都・慶州市で開かれました。慶州は朝鮮古代三国のひとつである新羅王国(三五六〜九三五)の都・金城の地で、ここにある石窟庵と仏国寺は一九九五年にユネスコ世界遺産とされています。中国の西安市、日本の小浜市、奈良市とは姉妹都市となっています。

慶州市に向けて私たち日本代表団が出発した九月二十日は、大型台風十五号の本土上陸が懸念されていました。が、予定通りのフライトで、無事、釜山の金海国際空港に到着。まずはひと安心。ここから慶州まではバスで一時間半ほどの行程でした。代表団の構成は国際交流基金から小倉和夫理事長以下五名(内二名は現地駐在)、当財団から宮田亮平理事長以下二名、加うるに東京文化財研究所の岡田健氏(保存修復センター副センター長)、東京藝術大学音楽学部邦楽科の学生の皆さん



第7回日中韓文化交流フォーラム。本会議場の模様。9月21日。慶州現代ホテルにて

七名から成るものでした。

慶州の秋は日本とほとんど変わらぬ風情で、たわわに実った稲穂に郷愁を覚えた人がいたかもしれません。

この夜は、崔良植・慶州市長主催の歓迎晩餐会。釜山から山本真澄領事もかけつけて下さいました。そうした中、崔市長の歓迎の辞で開宴。そして三カ国の代表がそれぞれ記念品を贈呈しい、和氣藹藹に会は進行。韓国代表団の鄭求宗委員長の発声で乾杯。大いに盛り上がった宴でした。

課題山積の中の 本会議

翌二十一日は、代表団の宿舎でもある「慶州現代ホテル」のサファイアホールで、午前九時より本会議。

今回のテーマは「東アジアにおける文化交流を推進するための方策」災害と文化の関わり、及び市民主導の文化交流の役割」です。

これは三月十一日の東日本大震災を多分に意識したものでした。会議の冒頭で進行役でもある鄭委員

つたと発言。そして、三カ国の知識人が団結して、文化交流を通じて相互の理解と発展を願っていると述べられました。

- ①災害と文化
- ②東アジアにおける文化交流を推進するための方策
- ③市民主導・市民参加の国際文化交流プログラムを開発
- ④フォーラムのあり方及びフォーラム名称の協議

この中で、当財団の宮田理事長は明年の中国でのフォーラムにおける文化芸術公演では三カ国の若者が自国の花をテーマに歌うことを提案。日本はサクラ、中国はモリファ(ジャスミン)、韓国はムグンファ(木槿)。実現すれば大変ユニークで新鮮なコーラスの競演となるでしょう。

今後の フォーラムを考える

本会議の後、崔楨苾(世宗大学博物館長)、苑利(中国芸術研究院研究員)、岡田健の三氏による文化財保存専門家の立場から「災害と文化財」をめぐる講演が行われました。

午後は会場を「慶州世界文化エキスポ公園」の百結公演場に移し、三カ国の伝統仮面劇が文化芸術公演として披露されました。日本からは能の舞囃子(クライマックスの部分)を演じたものとして「羽衣」が東京藝術大学邦楽科の学生の皆さんによって演じられました。中国は京劇で演じられる變臉(面を次々と変える一種の早変わり)を范万珠さんが見事に演じました。最後はホスト国である韓国の芸術総合学校の皆さんが鳳山タルチュム(仮面を用いた諷刺劇)を熱演。

会場の都台もあり「能」本来の舞台で演じることができなかったのが東京藝大の皆さんは大変だったでしょう。しかし、韓国、中国に共通の友人を持つことはよかつたと思います。これを機会に近い将来、韓中兩國で日本の古典芸能である「能」の魅力を本格的に紹介する努力が必要だと痛感した次第です。

日中韓文化交流フォーラムも、三巡目に入り、互いに遠慮なくも言える雰囲気になっていくことは評価すべきところですが、フォーラムの新名称をめぐって議論が噛み合わない点もあるなど、個々の課題は多くあるのも事実です。ともあれ、継続は力でもあるわけですから、互いにより一層の努力を重ねることが肝要でしょう。

最後に、お世話になった韓中兩國の関係者の皆様には衷心より敬意と感謝の念を表します。ありがとうございました。



今回の文化芸術公演のテーマは伝統仮面劇。東京藝術大学の邦楽科の学生の皆さんによって「羽衣」が紹介された。



中国からは京劇の一分野である變臉が紹介された。一瞬のうちに面が変わる早変わり驚嘆の声が……。



多彩な登場人物と民族色豊かな曲を背に演じられる諷刺劇。韓国民のエネルギーに満ちあふれた鳳山タルチュム。

本草医書から学ぶ 健康への提言



前野 哲也 | まえの てつや | 公益財団法人 武田科学振興財団 部長

公益財団法人武田科学振興財団は、「科学技術の研究を助成新興し、科学技術思想の普及を図り、もって我が国の科学技術及び文化の向上発展に寄与する」ことを目的とし、武田薬品工業株式会社からの寄附を基金として、一九六三年に設立されました。財団事業として、研究助成事業、奨学助成事業などのほかに、「文化事業への貢献」に類する事業として「わゆる『杏雨書屋(きょううしょおく)』事業を行っています。杏雨書屋とは、武田薬品工業株式会社ならびに武田家から寄贈された国宝三点、重要文化財十三点を含む本草医書等の資料約三万点、十三万冊を所蔵する図書資料館を指し、これら資料の永久保存と公開を事業として行っています。近年は所蔵図書の充実を図るため、寄贈も含め積極的に関係図書の収集も行っています。資料の永久保存を



覚書を交わす宮田理事長(右)と伊代表取締役

日本サムスン株式会社 尹晋赫代表取締役と当財団 宮田亮平理事長は、東日本大震災により被災した文化財の修復支援事業を実施することに合意し、平成二十三年九月九日(金)日本サムスン本社において、調印式とともに記者発表を行いました。記者発表には、朝日新聞社、日本経済新聞社、NHK、TBS、岩手めんこいテレビ及び東北放送の各社が取材に訪れ、当財団の宮田理事長からは、「人の命と同時に文化財の大切さ」を、日本サムスンの尹代表取締役からは、「文化財はアジア共通の遺産であり、社会貢献として修復を支援する」旨の挨拶に加え、両者ともに本事業の実施に際しては、故平山郁夫先生の唱えた文化財赤十字構想の精神がある旨強調しました。また、文化庁文化財部の栗原祐司美術学芸課長から、被災文化財の現状と文化庁の取り組みについて説明があり、日本サムスンから本事業の概要説明後、引き続き行わ

第2回

文化事業への貢献

世界には様々な「力」が存在します。政治力、経済力、軍事力……。そうした中で「文化力」が最も平和な力かもしれません。文化を育てあげることが、世界に日本の存在を発信する大きな力になるでしょう。こうした見地から御支援いただいている法人会員の皆様に文化への取り組みがうかがえました。

文化活動を通じて精神的な豊かさを広めたい

三井住友海上ではさまざまな分野の文化事業に対してさまざまな形で支援させていただいております。今回ご紹介させていただくのは、公益法人三井住友海上文化財団の活動です。三井住友海上文化財団は、日本が経済大国と呼ばれるようになった一九八〇年代に、日本がこれから求められるのは「芸術文化活動を通じての精神的な豊かさ」と潤いのある生活」ではないかという考えのもと、良き企業市民として地域社会の人々と共に文化を考え、文化を創造し、支援・育成する活動を行い、社会に貢献す

る趣旨で一九八八年に創立しました。三井住友海上文化財団の具体的な活動としては、①各地の公立文化ホールに著名な演奏家を派遣し、都道府県ならびに市町村と共催で、地域の皆さまへ質の高いコンサートを提供し、②地域における文化の振興のため、音楽・郷土芸能の分野で、有意義な国際交流活動をおこなうアマチュア団体に対し助成金の贈呈の活動を主に行っております。音楽を中心としたこの二つの活動を通して、精神的な豊かさを一人でも多くの方に持たせていただくことを実現していきたいと考えております。その思いを一層強くしたのが今回の東日本大震災でした。三井住友海上文化財団では、音楽を通じて何か役に立ちたいという想いを持った演奏家の方々と連絡をとり、音楽の持っている力で被災された方々の一人でも多くの方の心を癒し、そして一日でも早く精神的な豊かさを持つてもらうための企画を立て、特に被害の大きかった岩手・宮城・福島・茨城の四県で避難所などのコンサートを七月以降開催する取組をはじめていきます。こうした取組が復興の一助になることを願っております。



藤野 敬文 | ふじの のりふみ | 三井住友海上火災保険株式会社 総務部 地球環境・社会貢献室 課長

東日本大震災により被災した文化財の修復支援の取り組み

東日本大震災発生後、当財団はいちはやく被災した文化財の救援・修復のための募金活動を開始するとともに、文化庁長官からの協力要請にも応じて募金活動を行っております。この度は、日本サムスンからの提案により連携して被災文化財の修復支援に取り組むことになりました。

れた質疑応答では記者から活発な質問があり、人々の心の拠り所であり、「物言わぬもう一方の被災者」である文化財の修復支援に対する関心の高さが伺えました。

本事業は、平成二十四年から五年間に渡り実施するもので、日本サムスンが広く一般に寄付を呼びかけ、年間一千五百万円の寄付を募り、当財団も五百万円を負担し、五年間で一億円(約百件)の修復助成を目標としています。

なお、日本サムスンは、文化財保護の意義、日本の伝統美と受け継がれる匠の技などをまとめたオリジナル書籍を製作し、寄付をさせていただいた方々に無料で贈呈することにしています。オリジナル書籍の概要は次のとおりです。○タイトル…日本の美の源流を求めて―匠の系譜



記者会見会場

- 内容・体裁…毎年テーマを定め、五年シリーズとなります(陶磁、工芸、絵画、彫刻、建築)
- ・文化財保護の意義、日本の伝統美と受け継がれる匠の技
- ・日本と大陸との文化交流ロマンなどを予定・百六十ページ、オールカラー

(注)文化財赤十字構想
有形・無形を問わず、文化財は私たちの祖先が営々として築きあげてきた知的生産物です。これを次の世代に伝えることが、今を生きる私たちの役目です。
戦場で傷ついた兵士は敵味方関係なく救わねばならない。国際赤十字の精神は、創設者であるアンリ・デュナンのごうした考案から発展しました。故平山郁夫先生は、デュナンの心に同調し、これを自然災害、戦火等で傷つき救いを求めている文化財に適用しました。



原本：徳川美術館蔵 「早蕨」松岡 歩 模写

二〇一二年版カレンダーは、昨年引き続き徳川美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」を東京芸術大学日本画研究室が現状模写した作品を題材にしました。源氏物語の優美の世界と模写技

文化財保存修復支援カレンダー 募金のお知らせ

銀行振込の場合
三井住友銀行 上野支店
普通 6615496 口座名義(公財)
文化財保護・芸術研究助成財団 又は
郵便振替の場合
振替番号 00160-5-12319
加入者名(公財)文化財保護・芸術研究助成財団(通信欄に「地震」とお書きください)
なお、募金はクレジットカードからも可能です。詳細は当財団のホームページをご覧ください。

○東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金のお願い
東日本大震災によって被災した文化財の保全にむけて、募金活動を行っています。いただいた浄財は、被災地域の文化財の救援のために活用させていただきます。と共々、今後の修復・保存のために活用させていただきます。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。募金のお振込口座等は左記のとおりです。
*

お願い

術の素晴らしさを鑑賞してください。
一口二千五百円以上のご寄付を頂いた方にこのカレンダーを贈呈いたします。お申し込みは左記までお問い合わせください。
【お問い合わせ】
文化財保護・芸術研究助成財団カレンダー係
TEL(〇三)五六八五―二三一一
受付期間 10月11日(火)～1月13日(金)
受付時間 10時30分～17時
(土日、祝日、12月27日～1月5日はお休みです)

今月の表紙

平山郁夫 修学院離宮秋声



修学院離宮秋声 2004年

「平成洛中洛外図」の制作にあたって、平山画伯が取材のため修学院離宮を訪れたのは、二〇〇二年の秋である。

は、第八代天皇であらせられた後水尾帝が東山三十六峰のひとつ修学院山に造営された山荘である。桂離宮が数寄を凝らした造りであるのに対し、こちらは自然の中に自ら溶けこんでいく趣きをもっている。それだけにどこか牧歌的な空気も感じられる。
この作品は離宮の中で最も高い地に建っている「燐雲亭」からの眺めである。景色が装飾という発想から造られているため、燐雲亭の室内は実に簡素である。自然の美

○賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い
当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

法人正会員 年額(1口) 50万円
個人正会員 年額(1口) 1万円
維持会員 年額(1口) 10万円
財団案内および賛助会員入会申込書の請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。

編集後記

と人の美意識が見事に融合した修学院離宮。そこに共鳴すればこそ、画伯の手によってこの作品は誕生したと言えよう。

三月十一日の悪夢から半年。被災地の復興作業も軌道に乗りつつあるように思いますが、現地からの報告によれば、まだまだ前途遠慮。忍耐強く力を合わせてひたすら努力を重ねることが要求されるのは当然でしょう。

もの言わぬ被災者である被災文化財のレスキュー作業は一定の目処がたち、修復という次の段階に進みます。
今回の震災の規模からして被害の全体像は膨大なものになります。その中で、当財団は微力ではありますが、被災文化財救済のためキャンペーンをうち、この問題に取り組んでまいります。
秋も深まってまいります。皆さまお風邪など召しませんように……。

広報誌「絲綢之路」(シルクロード)
二〇一一年 秋号 通巻第六十七号

★平成二十三年十月十四日発行

★編集発行/公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎

〒110-0007 東京都台東区上野公園十二一五十

電話(〇三)五六八五―二三一一

FAX(〇三)五六八五―五二二五

URL: http://www.bunkazai.or.jp/

E-mail: jimukyoku@bunkazai.or.jp

★印刷 株式会社 東都工芸印刷